

松屋筆記

卷世二

45  
1397  
16



門 15  
號 1397  
卷 16

昭和五年二月十日  
高田 甲苗

新屋日記

廿二



乃八十二番

松屋の筆記巻世

目録

- 一 切の字の字跡を
- 二 仮字の字跡を用
- 三 びを井
- 四 鼓の音
- 五 石畳
- 六 石門
- 七 石城
- 八 出家の人
- 九 伊勢の賀島の社

Handwritten notes and scribbles at the top of the right page, including a circled character and some illegible text.

諸の例

九 象序

十 甲架沙衣手加切衣

十一 丈尺杖

十二 琴後身題目の沙汰

十三 形木并摺形木

十四 天地両巻

十五 櫻樹

十六 宇賀神白龍のり

十七 天下諸神増位

十八 震死

十九 若山大川

二十 壽星祠

二十一 神君

二十二 光明二種

二十三 天地大立并地震

二十四 密教部類

二十五 大日輝杖出

二十六 能留

二十七 砂糖餅

廿六 素<sup>ス</sup>餓<sup>カ</sup>  
 廿九 別<sup>リ</sup>當<sup>カ</sup>改<sup>シ</sup>  
 卅 此<sup>レ</sup>倉<sup>ノ</sup>解<sup>ル</sup>解<sup>ル</sup>命<sup>ヲ</sup>施<sup>ス</sup>餓<sup>シ</sup>  
 卅一 日<sup>ノ</sup>讀<sup>ム</sup>社<sup>ニ</sup>  
 卅二 市<sup>ノ</sup>姫<sup>ノ</sup>  
 卅三 市<sup>ノ</sup>餅<sup>ノ</sup>  
 卅四 悲<sup>シ</sup>幸<sup>シ</sup>揮<sup>キ</sup>抄<sup>シ</sup>出<sup>ス</sup>  
 卅五 最<sup>モ</sup>勝<sup>ル</sup>王<sup>ノ</sup>經<sup>ヲ</sup>抄<sup>シ</sup>出<sup>ス</sup>  
 卅六 齋<sup>ノ</sup>岳<sup>ノ</sup>  
 卅七 野<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>

卅八 標<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>  
 卅九 回<sup>ル</sup>天<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>  
 四十 天<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>

杉原年記卷廿二

京都 高田無清文信稿

一 叶 叶 子 哉 の 字 叶 ぬ ぬ

左 以 の 叶 ぬ 古 字 者 叶 ぬ と ぬ 子 哉  
の 字 叶 ぬ び ぬ ぬ と ぬ 叶 ぬ ぬ の  
ま ぬ や ぬ ぬ 万 葉 子 ぬ 叶 ぬ と ぬ 子  
ぬ の 叶 ぬ 子 哉 の 字 叶 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ が  
万 葉 子 ぬ ぬ <sup>七 葉 子</sup> 未 ぬ ぬ 新 獲 万 葉 子  
ぬ ぬ 鈍 の 字 叶 ぬ ぬ ぬ 日本 紀 子 ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ や ぬ ぬ が 子 と ぬ ぬ が 子 ぬ ぬ ぬ ぬ の 字 叶







よりしてはしを徳子一と云ん

七 石城

石城と云ふ地石川内奥に在りて名を以てし  
同防能を郡と云ふ石城社ありて人  
を石の邊にせしめ城ある所なりとい  
ふ事ありしなり

八 出家の人伊勢加賀氏の社

諸る例

大神宮内相傳記云記子別峰和  
尚云々今茲永徳二年春閏正月十

一遍上人傳記  
のまゝ

日師諸伊勢大神宮云々昔祖父乾峰  
和尚亦感奇瑞而相傳賀氏平賀  
遠因入彼内殿其法孫別峰和尚  
依端昔而相傳神明之加賀復入  
其大宮矣自吉秋氏入伊勢賀氏  
兩宮者雖名其儀例其外宮  
之事從此二大老始也

九 鼻窟

後宇多院所傳頂記子雲雅法師猷  
所鼻窟之遠傳之取所年鞋給寶系

欽云くすい改着所其属一室雅は勢  
献之華候此所 乃年鞋返賜資戻款

(十) 甲賀内記平賀内記

同記子甲賀内記平賀内記と云ふ  
之より人車記より 紫甲賀内記とあり

(十一) 丈尺杖

今世大工の尺杖といふものより  
尺ともあり 丈尺杖ともあり 人車記  
仁安元年十月のころ木工家以尺  
杖随寄 考仁之杖杭引鏡とも源

牙盛氣記福原庄部の多る丈尺と  
尺あり

(十二) 琴トヅリ後巻の題目の如く

清水濱五の 琴後巻の序に  
いふ所の名をわきまにす  
ハ古の記に 琴をえといふものあり  
なり ありたりと云ふ  
清曰神功紀行は 以千餘高嶺  
琴頭尾の記をもとにす

(十三) 形木 楯形木



以白龍為字漢神也凡王子八柱<sup>坐</sup>座<sup>坐</sup>也

天下諸神增位

諸神記中卷八所記本寺之名字神

位記

負觀以後<sup>天</sup>下<sup>一</sup>同

寬平九年三月十三日

從五位下

天慶三年正月六日

從五位上

永曆五年二月十日

正五位下

永治元年七月十日

從四位下

治承四年三月十三日

從四位上

諸神記卷伊賀國  
高野山天野社の  
名字之冊三天下  
諸神一階之時可  
考正位之  
同書也

元曆二年三月四日

留位下<sup>上</sup>

建仁元年二月十日

從三位

長元元年二月廿日

正三位

建治元年七月廿日

從二位

已上九ヶ度也奉計之令相當從二位  
給了 <sup>正三</sup>位<sup>上</sup>也

此社<sup>立</sup>於鎮座年紀者不分明也仍

以負觀以後天下諸神一階奉計之

同之日丙辰晴早且予諸<sup>四</sup>道<sup>一</sup>

品<sup>善</sup>成<sup>帝</sup>殿<sup>下</sup>序<sup>一</sup> 則破對面<sup>道</sup>之

一<sup>攝</sup>子<sup>之</sup>儀也

可存知之由被申之載籍汲之  
謂儀同三司第所至神位記  
撰政殿下序書持約之賴房朝臣  
同對面可談家君之由被載所書  
不可為何樣哉之由談后之間正一位  
不可有子細從二位神也無位神道  
被奉授極位例存之已二處也等句  
論也則於當有書出之  
一 至德元年九月十八日癸丑晴  
仲夏社神位莫談治家君可

宣下之由被御賴房朝臣了  
所所至神位記一位莫被  
仰談莫與朝臣可被  
宣下之狀如件

九月十八日 陽朔

額在中辨殿

一 中山中納言家君奉書曰  
所至社神位記莫被申撰  
政殿可有申所河法之由社  
仰也等謹言

九月廿一日 叙雅

大彌殿

一 至德元年九月二十一日

宣旨

從二位降五王神

宣旨授予一位之記

藏人頭左中辨辨房

口宣一紙獻上之早可祭下被

行之狀如件

九月廿一日

左中辨

辨房

道上 大炊乃門大知言殿

所位記持者，夏被御。家君  
倫旨云

所皇神位記可為持者之由  
振政殿所氣色所候也仍

執事如件

九月廿一日 左中辨辨房

謹上 神祇大副殿

抑大内記服服之後示補也  
者追可被道之礼也  
天慶諸神一階位部慶天曆延引了





也 天下一同之時 弘長元年二月同被奉  
授諸神之一階此日從回位下也建治  
元七又考諸一階但其中於極位之神  
者祇宜祀考宜左教位之昔社こ宣  
下祀者當階可為從回上之祭也左  
右凡今般被奉從二位者可宣已下  
等同十六日被奉後二位了考行藏  
人歟右中并忠光也  
○ 諸清抄子諸神記之卷ありし小部  
當教相主の撰こりて去のありし家記

とありしあり 且云又兼被奉主のりし

伸信友の抄録子本朝世紀天慶三年  
閏月の殿子坐中并山城國諸神記  
其十三卷是東西諸國賊亂之時被禱  
討滅賊類後天下諸神可被増加  
一階之由但云極位之神可被禱討  
戸引

○ 抄子信友曰く本朝世紀欠奉二冊  
京都之し一箇抄録ありは信友を  
しありしとありし坊司ありあり或高

貴の家の乃蔵の事と云ふ事あり群  
書数行の如きは存する事あり

其諸曰乃諸神増位の事と云ふ文徳天皇  
録嘉祥元年二月の事と云ふ事あり  
大曆三の巻曰乃諸神増位の事と云ふ事あり  
九年の事と云ふ事あり  
大和記の事と云ふ事あり  
大倭社記の事と云ふ事あり  
録二冊と云ふ事あり

①六 震死

雷の事と云ふ事あり  
略記曰乃諸神増位の事と云ふ事あり  
此の者多かりと云ふ事あり  
史記封禪書行の事と云ふ事あり  
慢神而震死と云ふ事あり  
射天後獵于河濱為暴雷震死と云ふ事あり

①九 名山大川

續日本紀の事と云ふ事あり  
山大川と云ふ事あり  
史記封禪書

特子始皇家遊東遊海上行禮祠在  
 山大川及ハ神求僊人善門之屬  
 仙人の名ニ下文ハ於ク之有テ  
 自五帝以迄秦鞅興鞅氣名山大川  
 或在諸侯或在天子其禮損益世  
 殊不可勝記及孝拜天下左祠  
 所常奉天地名山大川鬼神可得  
 而序也於是自教以東名山大川  
 祠ニ云々す其觀名山神祠所云々

② 壽星祠

史記封禪書云子壽星祠  
 隱曰壽星蒼角極老人星也見則  
 天下理安故祠之以祈福壽也正義  
 曰角亢在辰為壽星三月之時萬  
 物始生連於春氣布養於書其  
 性不罹大災故壽星也  
 福祿壽とりのり福祿壽の詩  
 梅花色尽歳花上身好よれの詩  
 信子かひあり

廿一 神君

東照宮以神君とす神子祀  
者りし君なきは神君と大神君  
得しとす神君の字史記封禪  
書子游水發振言上郎有巫病而  
鬼神下之上召是祠之耳氣及病  
使又問神君病巫之神神君言曰天  
子無憂病病少愈強與我會  
泉北是病愈遂起幸耳泉病  
良已大敬置酒壽宮神君壽宮

神君最隨者大一其位曰大槩司  
命之屬皆從之此可得見前其言言  
與人言壽宮とすは也

廿二 光明二種

大智度論七世子光明有二種一者  
火氣二者水氣日珠火氣月珠水  
氣火相雜焰上而人身中火上下  
遍到日火每尔是故夏月地水盡  
氣是故知火不皆上  
廿三 天地大主并地震

大智度論七卷付云佛為天地大主  
之くすく同卷下付九子六種震動曰  
種震動のすくを記す地節の若くは  
子地行る地震を十井とよまる  
日本紀歌よるも

廿五 密教部類

諸阿闍梨真言密教部類想録  
上下二卷あり天台 卷五子 往生院  
と卷五子とくも 記云とく 傳教弘法常渡田行田

仁惠運田珠宗叡の二部の入唐  
の傳を附一序とす時元慶の年  
正月二十日は元慶寺勅灌頂傳  
法沙門安然叙とあり八節の諸来  
や書藉併像畫高なる目錄  
あり諸来目錄い豊山蔵板の儀  
軌の中より

廿六 大毘盧遮那經抄出

大毘盧遮那成佛神變加持經七  
卷唐の沙門一行の譯○加持



○六等心日 ○受生心日 ○更改心日  
 ○思慮重凡夫心 ○希有事心  
 ○心地持心 ○阿闍梨心 ○地神心  
 ○法然道心 ○光明心  
 三昧心 ○不動心 ○無事心  
 ○大日勝心 ○大名稱心 ○授與心  
 大精進心 ○地神心 ○寶壽心  
 寶壽心 ○沙糖餅心 ○吉  
 祥心 ○舌相心 ○障者自

○心出心 ○障礙心 ○慧心  
 ○對治心 ○地神心 ○真言心  
 ○戲笑心 ○金剛色心 ○大屋  
 ○華心 ○鬘鬘心 ○教心 ○善心  
 ○心水心 ○決心 ○古佛心  
 ○歸命心 ○出現心 ○靜慮  
 ○地神心 ○天神心

大毘盧遮那成佛神系及加持經卷第...

(英) 鳩鷲





伊野安雄の法踏帯盤平巻三岩  
屋浦のあまの岩なるの海子別南汐と  
りあるあり岩なるの沖より和泉の橋  
つり汐筋の岩し汐の引くは流くし  
け汐よりなる舟ハの力のなるは  
まの汐より引くし別るの汐よりなる  
い海よりあるあり別るの場よりなるのき  
むのり岩大ありしはくく泉場より  
け大なるい餘大伏徳の場よりなること  
汐時をつらくは流くし先流る本

を流くし流る場のまの流るをよ  
き汐時とまうし本よりなるの汐  
より流くし別るの場よりありしもの心  
より汐時なれい別るの汐よりなる大周  
記ハ物語りより播く流るし一すの  
くけ帆の開合を以て別るの汐のあり  
をくくしとあるとくし

④ 屯倉 三倉郡 復子屯倉故趾 大榎 並  
同書六 列々の ありし 屯倉 の趾 ありし  
ありし三宅といふありし屯倉の趾ありし





ありと云々

○慈悲華經抄出

慈悲華經十卷 北凉天竺三藏法  
 所著 無識譯 ○大梵天王  
 一 ○諸林天子 ○他化自在天  
 子 ○眷属 ○此沙門天王  
 ○三十二相 半種好 ○禪定  
 ○名相 ○唐長吉相 ○純金  
 為地 ○天魔波旬 ○大  
 梵天王 ○天眼 ○堅

固自在 ○日月意 ○疾如  
 風口 ○畫掃 ○具足  
 法眼 ○大利益 ○  
 貧窮 ○竹葉年稿麻 ○  
 勸化 ○善根 ○氣索  
 ○彈指 ○三昧 ○姊妹  
 ○水神 地神 火神 風神  
 ○金光明最勝王經抄出  
 金光明最勝王經十卷 唐三藏  
 法師義淨奉制譯 ○

靜慮初 ○ 數念念日 ○ 堅牢地神  
○ 秋迦年尼如來壽命短促唯  
○ 三十大千大千世界  
○ 具足九文 ○ 解舍利  
○ 如芥子許 ○ 收納是  
樓觀 ○ 堅固 ○ 免角日 ○  
○ 鷓鴣鳥 ○ 顯見 ○ 出現  
○ 能現 ○ 苦海 ○ 三  
○ 相半 ○ 隨好 ○ 滿 ○ 堪忍  
○ 智知 ○ 行 ○ 回天王 ○

○ 勸請 ○ 三才 ○ 三才 ○ 滿  
○ 足 ○ 分別 ○ 對治  
○ 先現 ○ 顯現 ○ 大利  
○ 正法眼 ○ 不認識 ○ 過去  
未來現在 ○ 十方世界  
○ 最勝 ○ 顯現 ○ 一  
毛端相不殊 ○ 大金鼓  
○ 圓滿 ○ 苦海 ○ 金勝  
○ 地水火風 ○ 成身 ○ 稀林竹  
○ 草樹 ○ 一心頂禮而血佛言



日 ○江河神日 ○地尊六十八億踰  
 鎮那 九 ○林果苗稼神日 ○喜  
 提樹神喜女天 九三 ○春夏秋冬  
 三 ○四時食味神日 ○春生方  
 ○沙糖神日 ○樹神 九村 ○皮囊  
 九村 ○未嘗有 九日 ○異口同音日  
 ○菩提樹神 九村 ○華 軟草日 ○  
 舍利 九村 ○端正 九村 ○大竹林日  
 ○身不淨 九村 ○投身於虎 九日  
 餓虎 九村 ○侍從 九村 ○夢不祥 九村

○侍從 九村 ○灸 知法 九村 ○夢 牙  
 齒 九村 ○妹女 九村 ○鐘 交  
 九村 ○喜提樹神 九村

世 遊 齋

和泉國內神名帳に大鳥郡從日位  
 上遊齋社前あり 此の遊齋は新子  
 立國と築成や 力多の 後  
 齋や 日新の 後  
 子地名を 後

世 遊 齋 山





拿光明最勝王經卷第八 王法正論  
品二我說王法論利心諸有情為斷  
世間疑滅除累過失一切諸天王  
及人中王當生歡喜心合掌聽我  
說往昔諸天象鼻在舍剛山曰  
王從摩訶請問於大梵梵王最勝等  
天中大自在願哀慈我等為斷諸  
疑惑云何而得名天子云何生人間  
獨增為人王云何在天上復得作

天王如是護世間問彼梵王已商酌  
梵天主即為彼說護世法當知為  
利有情故向我治國法我說應喜  
聽由是善業力生天得作王者在  
人中統領為人王諸天共加護  
後入世胎既至世胎中諸天復守  
護雖生在人世當勝故名天由諸  
天護持而得名天子三十三天主分  
力助人王及一切諸天無資自在力  
降滅諸非以惡業念不生教有情

好

修七也九使四得生上三書經

天子作民父母以為天下主

詩

百辟卿士媚天子

後漢書延延何子尊尊為上故天

以為子位臨臣成章海者

秋解子路天祐而子之福天子云白

虎通接上稱天子者以以爵事天

也

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or name, located in the upper left corner of the right page. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper.



